

6課

霊的な賜物

8月8日

安息日午後

8月1日

暗証聖句

愛を追い求めなさい。また、霊の賜物を、ことに預言することを、熱心に求めなさい。(Iコリント14:1、口語訳)

愛を追い求めなさい。霊的な賜物、特に預言するための賜物を熱心に求めなさい。(Iコリント14:1、新共同訳)

今週の聖句

Iコリント12章、エフェソ(エペソ)4:11~13、Iコリント13章、
Iペトロ(ペテロ)4:8~11、Iコリント14:27、アモス3:7

今週のテーマ

人間の体のように、教会は一つですが、多くの教会員がおり、それぞれが異なる役割、機能、賜物を持っています。愛をもってこれらの霊的な賜物を実践することで、三位一体の神のご性質を反映する一体感が育まれます。

今週はIコリント12~14章と、そこに記されている霊的な賜物に関する教えを概観します。この箇所は、やや大きな区分の一部であり、パウロはそこで、宗教的な場においてクリスチャンに期待される振る舞いを扱っています(Iコリ11~14章)。パウロの第一の関心事は、無秩序な集会という問題です。この問題に対する彼の答えは、教会とは、「キリストの体を造り上げてゆ(く)」[口語訳「キリストのからだを建てさせ(る)」](エフェ[エペ]4:12)ために貢献するさまざまな機能を持つ部分から成る一つの体である、というものでした。要するに、神は多様性を通して一致を促すために、教会に霊的な賜物をお与えになったということです。

確かにパウロは、コリントの信徒への手紙I(コリント人への第一の手紙)の最初の4章で取り上げた分派争いの問題を依然として念頭に置いており、そこでは、教会員同士の意見の不一致に対する答えは、キリストにおける一致であるとされていました。今や彼は、霊的な賜物の役割に関する自身の理解を示すことで、その考えをさらに発展させています。パウロによれば、キリストと聖霊における一致こそが、分裂を避ける唯一の方法なのです。

※Ⅰコリ 1～4、11～14 章全体は、各自お手元の聖書をお読みください。

エフェ 4:12 (新共同訳)

4:12 こうして、聖なる者たちは奉仕の業に
適した者とされ、キリストの体を造り
上げてゆき、

エペ 4:12 (口語訳)

4:12 それは、聖徒たちをととのえて奉仕
のわざをさせ、キリストのからだを建て
させ、

日曜日 8月2日 賜物の多様性

原語のⅠコリント12:1でパウロは、「さて、……について」という表現を用いて新たな主題を提起しています。学者たちは、「……」に相当するギリシア語の「トーン・プネウマティコン」という言葉が「霊的な賜物」〔口語訳「**霊の賜物**」〕とも、「霊的な人々」〔口語訳「**霊の人**」〕とも解釈できるので、パウロがどちらについて語っているのかをめぐって議論しています。しかし、Ⅰコリント12:4でパウロが明らかに霊的な賜物について言及していることを踏まえると、「霊的な賜物(霊の賜物)」と解釈するほうが適切でしょう。同12:2、3でパウロは、聖霊の第一の賜物が、「イエスは主である」と大胆に告白することであると指摘しています。新約聖書の時代において、「イエスは主である」と言うことは、「皇帝は主でない」と言うのと同じでした(使徒 17:7、ヨハ 19:12、15)。それは皇帝の権力に対する反乱と見なされ、死刑に値する行為でした。

イエスもパウロも、たとえ迫害や死の脅威に直面しても、神への信仰は聖霊の賜物であると強調しました。実際、信仰は最も基本的な賜物です。Ⅰコリント 13:13で信仰が最初に挙げられているのは、驚くにはあたりません。信仰が霊的な賜物であることは、Ⅰコリント12:9のパウロの言葉からも明らかです。しかし、ほかにも多くの賜物があります。聖霊が「望むままに、……一人一人に」〔口語訳「**思いのままに、……各自に**」〕(Ⅰコリ 12:11)さまざまな賜物を分け与えてくださるという事実は、それらすべてが必要であることを証明しています。

問1 Ⅰコリント 12:1～6 を読んでください。この箇所の強調点は何ですか。

「いろいろ」〔口語訳「**種々**」〕という言葉の繰り返しは、賜物の多様性を強調しています。Ⅰコリント12:1でパウロが「霊的な賜物(霊の賜物)」と呼んでいるものは、4～6節で次の三つの異なる角度から詳しく説明されています。「賜物」(カリスマ)、「奉仕」あるいは「務め」〔口語訳「**務**」〕(ディアコニア)、「働き」(エネルゲマ)です。これらの言葉は、それぞれ異なる意味を持ちますが、この箇所では並行法が用いられているので、細かく区別しないことが重要です。また、霊的な賜物は、神の三位一体のご性質に基づく一致を促すことを意図されていることにも注目すべきです(エフェ〔エペ〕4:8～11も参照)。聖霊は信者に賜物を与えられますが、信者の共同体の中でキリストに仕える力を与えるのは、神です(Ⅰコリ 12:5、6)。それぞれの信者

には、個別に賜物が与えられますが(同12:11)、それらはすべて信者の共同体全体に益をもたらすべきものなのです。

ここでも一致が強調されています。なぜ一致は教会にとって重要なのでしょうか。

【参考】英語テキストにある全文

Notice again Paul's emphasis on unity. Why is this so important to the church?

パウロが一致を強調している点に、よく注意してください。なぜ一致は教会にとって重要なのでしょうか。

40

I コリ 12:1~11 (新共同訳)

12:1 兄弟たち、霊的な賜物については、次のことはぜひ知っておいてほしい。

12:2 あなたがたがまだ異教徒だったころ、誘われるままに、ものの言えない偶像のもとに連れて行かれたことを覚えているでしょう。

12:3 ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。

12:4 賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。

12:5 務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。

12:6 働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。

12:7 一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。

12:8 ある人には“霊”によって知恵の言葉、ある人には同じ“霊”によって知識の言葉が与えられ、

12:9 ある人にはその同じ“霊”によって信仰、ある人にはこの唯一の“霊”によって病気をいやす力、

12:10 ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、

I コリ 12:1~11 (口語訳)

12:1 兄弟たちよ。霊の賜物については、次のことを知らずにいてもらいたくない。

12:2 あなたがたがまだ異邦人であった時、誘われるまま、物の言えない偶像のところに引かれて行ったことは、あなたがたの承知しているとおりである。

12:3 そこで、あなたがたに言っておくが、神の霊によって語る者はだれも「イエスはのろわれよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」と言うことができない。

12:4 霊の賜物は種々あるが、御霊は同じである。

12:5 務は種々あるが、主は同じである。

12:6 働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである。

12:7 各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである。

12:8 すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、

12:9 またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物、

12:10 またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々

ある人には異言を解釈する力が与えられています。

12:11 これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。

使徒 17:7 (新共同訳)

17:7 ヤソンは彼らをかくまっているのです。彼らは皇帝の勅令に背いて、『イエスという別の王がいる』と言っています。」

ヨハ 19:12、15 (新共同訳)

19:12 そこで、ピラトはイエスを釈放しようと努めた。しかし、ユダヤ人たちは叫んだ。「もし、この男を釈放するなら、あなたは皇帝の友ではない。王と自称する者は皆、皇帝に背いています。」

19:15 彼らは叫んだ。「殺せ。殺せ。十字架につけろ。」ピラトが、「あなたたちの王をわたしが十字架につけるのか」と言うと、祭司長たちは、「わたしたちには、皇帝のほかに王はありません」と答えた。

I コリ 13:13 (新共同訳)

13:13 それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

エフェ 4:8～11 (新共同訳)

4:8 そこで、「高い所に昇るとき、捕らわれ人を連れて行き、人々に賜物を分け与えられた」と言われています。

4:9「昇った」というのですから、低い所、地上に降りておられたのではないでしょうか。

4:10 この降りて来られた方が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも更に高く昇られたのです。

4:11 そして、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教師、ある人を牧者、教師とされたのです。

の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている。

12:11 すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである。

使徒 17:7 (口語訳)

17:7 その人たちをヤソンが自分の家に迎え入れました。この連中は、みなカイザルの詔勅にそむいて行動し、イエスという別の王がいるなどと言っています。」

ヨハ 19:12、15 (口語訳)

19:12 これを聞いて、ピラトはイエスを許そうと努めた。しかしユダヤ人たちが叫んで言った、「もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王とするものはすべて、カイザルにそむく者です」。

19:15 すると彼らは叫んだ、「殺せ、殺せ、彼を十字架につけよ」。ピラトは彼らに言った、「あなたがたの王を、わたしが十字架につけるのか」。祭司長たちは答えた、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」。

I コリ 13:13 (口語訳)

13:13 このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である。

エペ 4:8～11 (口語訳)

4:8 そこで、こう言われている、「彼は高いところに上った時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えた」。

4:9 さて「上った」と言う以上、また地下の低い底にも降りてこられたわけではないか。

4:10 降りてこられた者自身は、同時に、あらゆるものに満ちるために、もろもろの天の上にまで上られたかたなのである。

4:11 そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。

I コリント12:4～6で導入された一致をあらわす言葉(「同じ霊」「同じ主」「同じ神」)〔口語訳「御霊は同じ」「主は同じ」「神は同じ」〕が、同12章の残りの部分でさらに詳しく説明されています。このことは、「同じ唯一の“霊”」〔口語訳「一つの同じ御霊」〕(I コリ 12:11)、「体は一つ」〔口語訳「からだは一つ」〕「一つの体」〔口語訳「一つのからだ」〕(同 12:12、13、20)、「一つの霊」〔口語訳「一つの御霊」〕(同 12:13〔2回〕)、「各部位が互いに配慮し合(う)」〔口語訳「それぞれの肢体が互にいたわり合う」〕(同 12:25)といった表現をパウロが用いていることから明らかです。

パウロは一致の概念に加え、「多くの部分」〔口語訳「肢体は多く」〕(I コリ 12:12、20)、「わたしたちは ……洗礼を受け(た)」〔口語訳「わたしたちは……バプテスマを受け」〕(同 12:13)、「一つの部分ではなく、多くの部分から成っています」〔口語訳「からだは一つの肢体だけではなく、多くのものからできている」〕(同 12:14)、「体全体」〔口語訳「からだ全体」〕(同 12:17)、「一つ一つの部分」〔口語訳「肢体をそれぞれ」〕(同 12:18)、「体の中で(の)部分」〔口語訳「からだのうち(の)肢体」〕(同 12:22、23)、「すべての部分」〔口語訳「肢体もみな」〕(同 12:26)といった表現を通して、キリストの体における部分の多様性を強調しています。このように一致と多様性の両方を強調することは、霊的な賜物が多様性を通して一致を促そうとしていることを示しています。

多様性の中でのこの一致は、神のご性質を反映しているに違いありません。父なる神は一つの位格であり、御子も、聖霊も、別の位格です。三者はそれぞれの個性を保ちながら、教会を築き上げ、宣教のために教会を力づけるために共に働いておられます(I コリ 12:4～6、エフェ〔エペ〕4:11～13)。

問2 I コリント 12:12～31 を読んでください。教会と教会員をあらわすのに、多くの部分を持つ体の比喻は、なぜ適切なのでしょうか。

I コリント12章の中心的な考えの一つは、体の各部分が個々にはそれぞれ異なっているにもかかわらず(I コリ 12:15～20)、どれもが依存し合っているということです(同 12:21～26)。足は、歩くべき場所を見るために目に依存していますが、同様に、目は何も触れることができず、手だけが触れることができます。また、ある部分がほかの部分よりも弱い(同 12:22)とか、恰好が悪い〔口語訳「見劣りがする」〕(同 12:23)とかいう考えは、単なる印象にすぎません。なぜなら、すべての部分が必要だからです(同 12:22)。

残念ながら、コリントの信徒の間には、ある賜物を重視し、ほかの賜物を軽視する傾向がありました。パウロは、彼らがこの過ちを犯さないように、「最高の道」〔口語訳「最もすぐれた道」〕(同 12:31)である愛に彼らの注意を引きつけました。言い換えれば、どんな賜物であれ、愛をもって賢明に用いるなら、それは神にとって喜ばしいことなのです。

キリストの体を造り上げるために、あなたは自分の賜物をどう用いますか。

【参考】英語テキストにある全文

See the lists of gifts in 1 Corinthians 12:8-10, 28; Romans 12:6-8; and Ephesians 4:11. What is your gift? How can you use it to edify the body of Christ?

I コリント 12:8～10、28、ローマ 12:6～8、エフェ(エペソ)4:11 にある、賜物のリストをご覧ください。あなたの賜物は何ですか。キリストの体を造り上げる(口語訳:建てる)ために、あなたは自分の賜物をどのように用いますか。

41

I コリ 12:4～31 (新共同訳)

12:4 賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。

12:5 務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。

12:6 働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。

12:7 一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。

12:8 ある人には“霊”によって知恵の言葉、ある人には同じ“霊”によって知識の言葉が与えられ、

12:9 ある人にはその同じ“霊”によって信仰、ある人にはこの唯一の“霊”によって病気をいやす力、

12:10 ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。

12:11 これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。

12:12 体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。

12:13 つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。

12:14 体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。

I コリ 12:4～31 (口語訳)

12:4 霊の賜物は種々あるが、御霊は同じである。

12:5 務は種々あるが、主は同じである。

12:6 働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである。

12:7 各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである。

12:8 すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、

12:9 またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物、

12:10 またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている。

12:11 すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである。

12:12 からだが一つであっても肢体は多くあり、また、からだのすべての肢体が多くあっても、からだは一つであるように、キリストの場合も同様である。

12:13 なぜなら、わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだからである。

12:14 実際、からだは一つの肢体だけではなく、多くのものからできている。

12:15 足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。

12:16 耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。

12:17 もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでにおいをかぎますか。

12:18 そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。

12:19 すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。

12:20 だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。

12:21 目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。

12:22 それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。

12:23 わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようします。

12:24 見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。

12:25 それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮合っています。

12:26 一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

12:27 あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。

12:28 神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。

12:15 もし足が、わたしは手ではないから、からだに属していないと言っても、それで、からだに属さないわけではない。

12:16 また、もし耳が、わたしは目ではないから、からだに属していないと言っても、それで、からだに属さないわけではない。

12:17 もしからだ全体が目だとすれば、どこで聞くのか。もし、からだ全体が耳だとすれば、どこでかぐのか。

12:18 そこで神は御旨のままに、肢体をそれぞれ、からだに備えられたのである。

12:19 もし、すべてのものが一つの肢体なら、どこにからだがあるのか。

12:20 ところが実際、肢体は多くあるが、からだは一つなのである。

12:21 目は手にむかって、「おまえはいらない」とは言えず、また頭は足にむかって、「おまえはいらない」とも言えない。

12:22 そうではなく、むしろ、からだのうちで他よりも弱く見える肢体が、かえって必要なのであり、

12:23 からだのうちで、他よりも見劣りがすると思えるところに、ものを着せていっそう見よくする。麗しくない部分はいっそう麗しくするが、

12:24 美しい部分はそうする必要がない。神は劣っている部分をいっそう見よくして、からだに調和をお与えになったのである。

12:25 それは、からだの中に分裂がなく、それぞれの肢体が互にいたわり合うためなのである。

12:26 もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。

12:27 あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である。

12:28 そして、神は教会の中で、人々を立てて、第一に使徒、第二に預言者、第三に教師とし、次に力あるわざを行う者、次にいやしの賜物を持つ者、また補助者、管理者、種々の異言を語る者をおかれた。

12:29 皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。

12:30 皆が病気をいやす賜物を持っているのだろうか。皆が異言を語るのだろうか。皆がそれを解釈するのだろうか。

12:31 あなたがたは、もっと大きな賜物を受けよう熱心に努めなさい。そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます。

エフェ 4:11～13 (新共同訳)

4:11 そして、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教者、ある人を牧者、教師とされたのです。

4:12 こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、

4:13 ついには、わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。

ロマ 12:6～8 (新共同訳)

12:6 わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、

12:7 奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、

12:8 勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。

12:29 みんなが使徒だろうか。みんなが預言者だろうか。みんなが教師だろうか。みんなが力あるわざを行う者だろうか。

12:30 みんながいやしの賜物を持っているのだろうか。みんなが異言を語るのだろうか。みんなが異言を解くのだろうか。

12:31 だが、あなたがたは、更に大いなる賜物を得ようと熱心に努めなさい。そこで、わたしは最もすぐれた道をあなたがたに示そう。

エペ 4:11～13 (口語訳)

4:11 そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。

4:12 それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、

4:13 わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。

ロマ 12:6～8 (口語訳)

12:6 このように、わたしたちは与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っているので、もし、それが預言であれば、信仰の程度に応じて預言をし、

12:7 奉仕であれば奉仕をし、また教える者であれば教え、

12:8 勧めをする者であれば勧め、寄附する者は惜しみなく寄附し、指導する者は熱心に指導し、慈善をする者は快く慈善をすべきである。

火曜日 8月4日 「最高の道」

「愛は、数ある賜物の中の一つではない。愛は、すべての賜物が究極の目的を達するための手段なのである」(カール・P・コサート「コリントの信徒への手紙Ⅰ」『アンドリュース聖書注解——新約聖書』1643 ページ、英文)。

【参考】— Carl P. Cosaert, “1 Corinthians,” Andrews Bible Commentary: New Testament, p. 1643. “Love is not one gift among many. It is the means through which all of the gifts reach their ultimate purpose.”

問3 I コリント 13:1~7 と I ペトロ (ペテロ) 4:8~11 を読んでください。霊的な賜物に関して言えば、愛はどんな役割を果たしますか。

I コリント13章は、愛を通してのみ霊的な賜物を適切に用いることができると教えています。パウロはこの章の冒頭で、I コリント12章で言及されている賜物に触れ、愛によって突き動かされなければ、それらの賜物には価値がないと強調しています。ですから、知識(I コリ 12:8)や信仰(同 12:9)は、「山を動かすほどの」〔口語訳「山を移すほどの」〕(同 13:2)信仰でさえ、愛がなければ、何の価値もありません(同 13:2)。愛がなければ、異言を語る力(同 12:10、28、30)も、単に「騒がしいどら、やかましいシンバル」〔口語訳「やかましい鐘や騒がしい鏡鉢」〕(同 13:1)にすぎません。同様に、預言という重要な賜物でさえ、愛がなければ、無に等しいのです(I コリ13:2)。

I コリント13:4~7でパウロは、愛とは何であって、何でないか、もっと詳しく言えば、愛は何をし、何をしないかに焦点を合わせています。彼が愛を特徴づけるために選んだ動詞は、愛とは、私たちが感じるものではなく、私たちが実践するものであることを示しています。ですからパウロは、愛は、(1)忍耐強く〔口語訳:寛容であり〕、(2)情け深く〔口語訳:情深い〕、(3)真実を喜び、(4)すべてを忍び、(5)すべてを信じ、(6)すべてを望み、(7)すべてを耐える、と言っています。また逆に、愛は、(1)ねたまず、(2)自慢せず〔口語訳:誇らない〕、(3)高ぶらず〔口語訳:高ぶらない〕、(4)礼を失せず〔口語訳:不作法をしない〕、(5)自分の利益を求めず、(6)いらだたず、(7)恨みを抱かず、(8)不義を喜ばない、ともあります。

この合計15の動詞は、賜物を実践する際の適切な振る舞いについて確かな指針を与えています。注目すべきことに、愛の本質に関するこの議論は、パウロが霊的な賜物に関する対立を扱っている I コリント12章と14章の間にあります。確かに、愛は霊的な賜物を賢明に用いるうえでの鍵なのです。愛はまた、信仰や希望と並べられ、「その中で最も大いなるものは、愛である」〔口語訳「このうちで最も大いなるものは、愛である」〕(I コリ 13:13)と位置づけられています。

なぜ愛は私たちの信仰の中心なのか。神の愛を体験するうえで、その愛を他者に反映しようと努めること以上に、より良い方法があるでしょうか。

42

I コリ 13:1~7 (新共同訳)

13:1 たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。

13:2 たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていよう

I コリ 13:1~7 (口語訳)

13:1 たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鏡鉢と同じである。

13:2 たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識と

とも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。

13:3 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

13:4 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。

13:5 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。

13:6 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。

13:7 すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

I ペト 4:8~11 (新共同訳)

4:8 何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。

4:9 不平を言わずにもてなし合いなさい。

4:10 あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。

4:11 語る者は、神の言葉を語るにふさわしく語りなさい。奉仕をする人は、神がお与えになった力に応じて奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して、神が栄光をお受けになるためです。栄光と力とが、世々限りなく神にありますように、アーメン。

I コリ 12:8~10 (新共同訳)

12:8 ある人には“霊”によって知恵の言葉、ある人には同じ“霊”によって知識の言葉が与えられ、

12:9 ある人にはその同じ“霊”によって信仰、ある人にはこの唯一の“霊”によって病気をいやす力、

12:10 ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。

I コリ 12:28、30 (新共同訳)

12:28 神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う

に通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。

13:3 たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。

13:4 愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。

13:5 不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。

13:6 不義を喜ばないで真理を喜ぶ。

13:7 そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

I ペト 4:8~11 (口語訳)

4:8 何よりもまず、互の愛を熱く保ちなさい。愛は多くの罪をおおうものである。

4:9 不平を言わずに、互にもてなし合いなさい。

4:10 あなたがたは、それぞれ賜物をいただいているのだから、神のさまざまな恵みの良き管理人として、それをお互のために役立てるべきである。

4:11 語る者は、神の御言を語る者にふさわしく語り、奉仕する者は、神から賜わる力による者にふさわしく奉仕すべきである。それは、すべてのことにおいてイエス・キリストによって、神があがめられるためである。栄光と力とが世々限りなく、彼にあるように、アーメン。

I コリ 12:8~10 (口語訳)

12:8 すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、

12:9 またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物、

12:10 またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わけける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている。

I コリ 12:28、30 (口語訳)

12:28 そして、神は教会の中で、人々を立てて、第一に使徒、第二に預言者、第三に教師とし、次に力あるわざを行う者、

者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。

12:30 皆が病気をいやす賜物を持っているのだろうか。皆が異言を語るのだろうか。皆がそれを解釈するのだろうか。

I コリ 13:13 (新共同訳)

13:13 それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

次にいやしの賜物を持つ者、また補助者、管理者、種々の異言を語る者をおかれた。

12:30 みんながいやしの賜物を持っているのだろうか。みんなが異言を語るのだろうか。みんなが異言を解くのだろうか。

I コリ 13:13 (口語訳)

13:13 このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である。

水曜日 8月5日 異言の賜物

異言の賜物については、どうでしょうか。聖書のほかの箇所(マコ 16:17、使徒 2:1~13、10:44~48、19:6)における異言の賜物のあらわれ方と一致して、コリントの信徒への手紙 I (コリント人への第一の手紙)における異言の賜物は、聖霊によって与えられた外国語を話す能力を指しているようです。

I コリント12:8~10の賜物の一覧の中で、パウロは異言の賜物に触れています(I コリ 12:28、30、13:1、8も参照)、14章では、この賜物について何度も繰り返し言及しています。実際、「グローッサ」(「舌、言語」というギリシア語は、I コリント12~14章に20回以上、14章だけでも15回出てくるのです。このほかに、「ヘテログローソス」(「別の言語、異国の言葉」というギリシア語も、同14:21に出てきます。このように異言の賜物に関する言及が多いことは、この問題がパウロにとって特別な関心事であったことを示唆しています。コリントの教会では、この異言の賜物の誤用、乱用が、公の礼拝に混乱をもたらしていたのです(I コリ 14:23、27、33、40)。

問4 I コリント 14:5、13、26、27 と 12:10、30 を読んでください。異言の賜物に関して、パウロは特にどんな指示を与えましたか。

異言を話す賜物とそれを解釈する賜物が伴わなければならない理由は、異言が理解可能でなければならないからです(I コリ 14:9)。そうでなければ、この賜物を用いることに何の益もありません(同 14:6)。このことは、パウロが解釈と理解をこれほど重視した理由を説明しています。明らかに、彼が批判しているのは異言の賜物そのものではなく、明日の研究で見えるように、コリントの信徒がそれを過度に重視し、預言の賜物を軽んじたことです。

ここで注目すべき重要な点は、パウロは、コリントの信徒全員が異言を話せるようになることを願ってはいたものの(同 14:5)、そうなることを期待してはいなかったということです(同 12:10)。それゆえ、「聖霊のバプテスマを受けたと主張する前に、すべての人が異言を話さなければならない」という考えは、「I コリント12章と

14章におけるパウロの教えの歪曲である」のです(ラウル・デデレン『セブンスデー・アドベンチスト神学ハンドブック』 電子版、注解参照シリーズ 第12巻 620 ページ、英文)。

【参考】—Raoul Dederen, Handbook of Seventh-day Adventist Theology, Commentary Reference Series, vol. 12, p. 620.

“all must speak in tongues before claiming baptism in the Holy Spirit is a perversion of Paul’s teaching in 1 Corinthians 12 and 14.”

あなたの教会には、外国語を話せる人がいますか。彼らはいかにこの能力を用いて、キリストのために人々に伝道できるでしょうか。この事実は、パウロが述べている異言の本質を理解するうえで、いかに役立ちますか。

43

マコ 16:17 (新共同訳)

16:17 信じる者には次のようなしるしが伴う。彼らはわたしの名によって悪霊を追い出し、新しい言葉を語る。

使徒 2:1~13 (新共同訳)

2:1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、

2:2 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。

2:3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。

2:4 すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

2:5 さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、

2:6 この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。

2:7 人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリリヤの人ではないか。」

2:8 どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。

2:9 わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、

マコ 16:17 (口語訳)

16:17 信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、

使徒 2:1~13 (口語訳)

2:1 五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、

2:2 突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった。

2:3 また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。

2:4 すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。

2:5 さて、エルサレムには、天下のあらゆる国々から、信仰深いユダヤ人たちがきて住んでいたが、

2:6 この物音に大ぜいの人が集まってきて、彼らの生れ故郷の国語で、使徒たちが話しているのを、だれもかれも聞いてあっけに取られた。

2:7 そして驚き怪しんで言った、「見よ、いま話しているこの人たちは、皆ガリリヤ人ではないか。」

2:8 それなのに、わたしたちがそれぞれ、生れ故郷の国語を彼らから聞かされるとは、いったい、どうしたことか。

2:9 わたしたちの中には、パルティア人、メジャヤ人、エラム人もおれば、メソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポントとアジア、

2:10 フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、

2:11 ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

2:12 人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。

2:13 しかし、「あの人たちは、新しいかどうか酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

使徒 10:44~48 (新共同訳)

10:44 ペトロがこれらのことをなおも話し続けていて、御言葉を聞いている一同の上に聖霊が降った。

10:45 割礼を受けている信者で、ペトロと一緒に来た人は皆、聖霊の賜物が異邦人の上にも注がれるのを見て、大いに驚いた。

10:46 異邦人が異言を話し、また神を賛美しているのを、聞いたからである。そこでペトロは、

10:47「わたしたちと同様に聖霊を受けたこの人たちが、水で洗礼を受けるのを、いったいだれが妨げることができますか」と言った。

10:48 そして、イエス・キリストの名によって洗礼を受けるようにと、その人たちに命じた。それから、コルネリウスたちは、ペトロになお数日滞在するようにと願った。

使徒 19:6 (新共同訳)

19:6 パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が降り、その人たちは異言を話したり、預言をしたりした。

I コリ 12:8~10 (新共同訳)

12:8 ある人には“霊”によって知恵の言葉、ある人には同じ“霊”によって知識の言葉が与えられ、

12:9 ある人にはその同じ“霊”によって信仰、ある人にはこの唯一の“霊”によって病気をいやす力、

2:10 フリギアとパンフィリア、エジプトとクレネに近いリビア地方などに住む者もいるし、またローマ人で旅にきている者、

2:11 ユダヤ人と改宗者、クレタ人とアラビヤ人もいるのだが、あの人々がわたしたちの国語で、神の大きな働きを述べるのを聞くとはい、どうしたことか」。

2:12 みんなの者は驚き惑って、互に言い合った、「これは、いったい、どういうわけなのだろう」。

2:13 しかし、ほかの人たちはあざ笑って、「あの人たちは新しい酒で酔っているのだ」と言った。

使徒 10:44~48 (口語訳)

10:44 ペトロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった。

10:45 割礼を受けている信者で、ペトロについてきた人たちは、異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれたのを見て、驚いた。

10:46 それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである。

そこで、ペトロが言い出した、

10:47「この人たちがわたしたちと同じように聖霊を受けたからには、彼らに水でバプテスマを授けるのを、だれがこぼみ得ようか」。

10:48 こう言って、ペトロはその人々に命じて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けさせた。それから、彼らはペトロに願って、なお数日のあいだ滞在してもらった。

使徒 19:6 (口語訳)

19:6 そして、パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らにくだり、それから彼らは異言を語ったり、預言をしたり出した。

I コリ 12:8~10 (口語訳)

12:8 すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、

12:9 またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物、

12:10 ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。

I コリ 12:28~30 (新共同訳)

12:28 神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。

12:29 皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。

12:30 皆が病気をいやす賜物を持っているのだろうか。皆が異言を語るのだろうか。皆がそれを解釈するのだろうか。

I コリ 13:1、8 (新共同訳)

13:1 たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。

13:8 愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、

I コリ 14:21、23、27、33、40 (新共同訳)

14:21 律法にこう書いてあります。『異国の言葉を語る人々によって、異国の民の唇で/わたしはこの民に語るが、それでも、彼らはわたしに耳を傾けないだろう』/と主は言われる。』

14:23 教会全体が一緒に集まり、皆が異言を語っているところへ、教会に来て間もない人が信者でない人が入って来たら、あなたがたのことを気が変だとは言わないでしようか。

14:27 異言を語る者がいれば、二人かせいぜい三人が順番に語り、一人に解釈させなさい。

14:33 神は無秩序の神ではなく、平和の神だからです。聖なる者たちのすべての教会でそうであるように、

14:40 しかし、すべてを適切に、秩序正しく行いなさい。

I コリ 14:5~10、13、26、27 (新共同訳)

14:5 あなたがた皆が異言を語れるにこ

12:10 またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見分ける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている。

I コリ 12:28~30 (口語訳)

12:28 そして、神は教会の中で、人々を立てて、第一に使徒、第二に預言者、第三に教師とし、次に力あるわざを行う者、次にいやしの賜物を持つ者、また補助者、管理者、種々の異言を語る者をおかれた。

12:29 みんなが使徒だろうか。みんなが預言者だろうか。みんなが教師だろうか。みんなが力あるわざを行う者だろうか。

12:30 みんながいやしの賜物を持っているのだろうか。みんなが異言を語るのだろうか。みんなが異言を解くのだろうか。

I コリ 13:1、8 (口語訳)

13:1 たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鏡鉢と同じである。

13:8 愛はいつまでも絶えることがない。しかし、預言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであろう。

I コリ 14:21、23、27、33、40 (口語訳)

14:21 律法にこう書いてある、「わたしは、異国の古と異国のくちびるとで、この民に語るが、それでも、彼らはわたしに耳を傾けない、と主が仰せになる」。

14:23 もし全教会が一緒に集まって、全員が異言を語っているところに、初心者か不信者が来てきたら、彼らはあなたがたが気が変になったと言うだろう。

14:27 もし異言を語る者があれば、ふたりか、多くて三人の者が、順々に語り、そして、ひとりがそれを解くべきである。

14:33 神は無秩序の神ではなく、平和の神である。聖徒たちのすべての教会で行われているように、

14:40 しかし、すべてのことを適宜に、かつ秩序を正して行うがよい。

I コリ 14:5~10、13、26、27 (口語訳)

14:5 わたしは実際、あなたがたがひとり

したことはないと思いますが、それ以上に、預言できればと思います。異言を語る者がそれを解釈するのでなければ、教会を造り上げるためには、預言する者の方がまっています。

14:6 だから兄弟たち、わたしがあなたがたのところに行って異言を語ったとしても、啓示か知識か預言か教えかによって語らなければ、あなたがたに何の役に立つでしょう。

14:7 笛であれ竖琴であれ、命のない楽器も、もしその音に変化がなければ、何を吹き、何を弾いているのか、どうして分かるでしょう。

14:8 ラッパがはっきりした音を出さなければ、だれが戦いの準備をしますか。

14:9 同じように、あなたがたも異言で語って、明確な言葉を口にしなければ、何を話しているか、どうして分かってもらえましょう。空に向かって語ることになるからです。

14:10 世にはいろいろな種類の言葉があり、どれ一つ意味を持たないものはありません。

14:13 だから、異言を語る者は、それを解釈できるように祈りなさい。

14:26 兄弟たち、それではどうすればよいだろうか。あなたがたは集まったとき、それぞれ詩編の歌をうたい、教え、啓示を語り、異言を語り、それを解釈するのですが、すべてはあなたがたを造り上げるためにすべきです。

14:27 異言を語る者がいれば、二人かせいぜい三人が順番に語り、一人に解釈させなさい。

I コリ 12:10、30（新共同訳）

12:10 ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。

12:30 皆が病気をいやす賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るだろうか。皆がそれを解釈するだろうか。

残らず異言を語ることを望むが、特に預言をしてもらいたい。教会の徳を高めるように異言を解かない限り、異言を語る者よりも、預言をする者の方がまっている。

14:6 だから、兄弟たちよ。たといわたしがあなたがたの所に行って異言を語るとしても、啓示か知識か預言か教かを語らなければ、あなたがたに、なんの役に立つだろうか。

14:7 また、笛や立琴のような楽器でも、もしその音に変化がなければ、何を吹いているのか、弾いているのか、どうして知ることができようか。

14:8 また、もしラッパがはっきりした音を出さないなら、だれが戦闘の準備をするだろうか。

14:9 それと同様に、もしあなたがたが異言ではっきりしない言葉を語れば、どうしてその語ることがわかるだろうか。それでは、空にむかって語っていることになる。

14:10 世には多種多様の言葉があるだろうが、意味のないものは一つもない。

14:13 このようなわけであるから、異言を語る者は、自分でそれを解くことができるように祈りなさい。

14:26 すると、兄弟たちよ。どうしたらよいのか。あなたがたが一緒に集まる時、各自はさんびを歌い、教をなし、啓示を告げ、異言を語り、それを解くのであるが、すべては徳を高めるためにすべきである。

14:27 もし異言を語る者があれば、ふたりか、多くて三人の者が、順々に語り、そして、ひとりがそれを解くべきである。

I コリ 12:10、30（口語訳）

12:10 またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わけの力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている。

12:30 みんながいやしの賜物を持っているのだろうか。みんなが異言を語るのだろうか。みんなが異言を解くのだろうか。

預言の賜物は、靈的な賜物に関するパウロの議論の中で重要な位置を占めており、興味深いことに、通常は、異言の賜物よりも先に言及されています(Ⅰコリ 12:10、28、13:8)。異言の賜物が最初に言及される場合もありますが、それは預言の賜物と比較して、異言の賜物のほうが相対的に重要でないことを強調するときだけです(同 14:4、5、6、22)。

問5 エフェソ(エペソ) 4:11～13 とⅠコリント 14:3、4 を読んでください。これらの箇所は、靈的な賜物全般の目的について、また特に預言の賜物の目的について、何と述べていますか。

預言の賜物は、造り上げ、励まし、慰めるためのものです(Ⅰコリ 14:3、使徒 15:32と比較)。これは、預言が未来を予告することよりも、むしろ現在をどう生きるかに関係していることを示しています。ギリシア語の動詞「プロフェーテウオー」は、「前もって何かを語る」という意味にも、「誰かに代わって何かを語る」という意味にも用いられます。例えば、前者の意味は、使徒言行録(使徒行伝) 2:29～31(アモ 3:7と比較)に見られ、そこではダビデが預言者であるということが、「前もって知(る)」こととして理解されています。後者の意味は、使徒言行録(使徒行伝) 15:32に見られ、そこではユダとシラスが預言者であるとされています。しかし、彼らの「預言」とは、「いろいろと話をして兄弟たちを励まし力づけ(る)」ことでした。

エフェソ(エペソ) 4:11～13から、靈的な賜物が使徒時代で終わったのではないことがわかります。靈的な賜物は、終わりの日まで存続するはず(使徒 2:39)。しかし、もし誰かが自分を預言者であると主張するなら、その人は聖書に基づいて吟味されなければなりません。大まかに言えば、四つの基準を満たす必要があります。第一に、預言が必ず成就すること(申 18:22、エレ 28:8、9)。第二に、そのメッセージが過去の預言者たちのメッセージと一致していること(申 13:2～4【口語訳 13:1～3】、イザ 8:20)。第三に、その人の日々の生活がキリストへの献身を示していること(Ⅰヨハ 4:1～3)。第四に、イエスが言われたように、偽預言者はその実によって見分けられること(マタ 7:15～20)。このことは、真の預言者についても当てはまります。

黙示録は、預言の賜物が残りの教会の際立った特徴であることを示しています(黙 12:17、19:10)。私たちセブンスデー・アドベンチストは、預言の賜物がエレン・ホワイトに授けられ、彼女の著作に反映されていると信じています。

【参考】英語テキストにある文

What are all the reasons we have for belief in Ellen G. White's prophetic gift? What questions remain about her role and authority?

エレン・G・ホワイトの預言の賜物を信じる理由は、一体どのようなものがあるのでしょうか。彼女の役割や権威については、まだどんな疑問が残っているのでしょうか。

44

I コリ 12:10、28 （新共同訳）

12:10 ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。

12:28 神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。

I コリ 13:8 （新共同訳）

13:8 愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、

I コリ 14:4～6 （新共同訳）

14:4 異言を語る者が自分を造り上げるのに対して、預言する者は教会を造り上げます。

14:5 あなたがた皆が異言を語れるにこしたことはないと思いますが、それ以上に、預言でさればと思います。異言を語る者がそれを解釈するのでなければ、教会を造り上げるためには、預言する者の方がまさっています。

14:6 だから兄弟たち、わたしがあなたがたのところに行って異言を語ったとしても、啓示か知識か預言か教えかによって語らなければ、あなたがたに何の役に立つでしょう。

I コリ 14:22 （新共同訳）

14:22 このように、異言は、信じる者のためではなく、信じていない者のためのしるしですが、預言は、信じていない者のためではなく、信じる者のためのしるしです。

エペ 4:11～13 （新共同訳）

4:11 そして、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教者、ある人を牧者、教師とされたのです。

I コリ 12:10、28 （口語訳）

12:10 またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている。

12:28 そして、神は教会の中で、人々を立てて、第一に使徒、第二に預言者、第三に教師とし、次に力あるわざを行う者、次にいやしの賜物を持つ者、また補助者、管理者、種々の異言を語る者をおかれた。

I コリ 13:8 （口語訳）

13:8 愛はいつまでも絶えることがない。しかし、預言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであろう。

I コリ 14:4～6 （口語訳）

14:4 異言を語る者は自分だけの徳を高めるが、預言をする者は教会の徳を高める。

14:5 わたしは実際、あなたがたがひとり残らず異言を語ることを望むが、特に預言をしてもらいたい。教会の徳を高めるように異言を解かない限り、異言を語る者よりも、預言をする者の方がまさっている。

14:6 だから、兄弟たちよ。たといわたしがあなたがたの所に行って異言を語るとしても、啓示か知識か預言か教かを語らなければ、あなたがたに、なんの役に立つだろうか。

I コリ 14:22 （口語訳）

14:22 このように、異言は信者のためではなく未信者のためのしるしであるが、預言は未信者のためではなく信者のためのしるしである。

エペ 4:11～13 （口語訳）

4:11 そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。

4:12 こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、

4:13 ついには、わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。

I コリ 14:3、4 (新共同訳)

14:3 しかし、預言する者は、人に向かって語っているので、人を造り上げ、励まし、慰めます。

14:4 異言を語る者が自分を造り上げるのに対して、預言する者は教会を造り上げます。

使徒 15:32 (新共同訳)

15:32 ユダとシラスは預言する者でもあったので、いろいろと話をし、兄弟たちを励まし力づけ、

使徒 2:29～31 (新共同訳)

2:29 兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあり、はっきり言えます。

2:30 ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。

2:31 そして、キリストの復活について前もって知り、『彼は陰府に捨てておかれず、その体は朽ち果てることがない』と語りました。

アモ 3:7 (新共同訳)

3:7 まことに、主なる神はその定められたことを/僕なる預言者に示さずには/何事もなされません。

使徒 2:39 (新共同訳)

2:39 この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいてすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」

申 18:22 (新共同訳)

18:22 その預言者が主の御名によって語っても、そのことが起こらず、実現しな

4:12 それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、

4:13 わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。

I コリ 14:3、4 (口語訳)

14:3 しかし預言をする者は、人に語ってその徳を高め、彼を励まし、慰めるのである。

14:4 異言を語る者は自分だけの徳を高めるが、預言をする者は教会の徳を高める。

使徒 15:32 (口語訳)

15:32 ユダとシラスとは共に預言者であったので、多くの言葉をもって兄弟たちを励まし、また力づけた。

使徒 2:29～31 (口語訳)

2:29 兄弟たちよ、族長ダビデについては、わたしはあなたがたにむかって大胆に言うことができる。彼は死んで葬られ、現にその墓が今日に至るまで、わたしたちの間に残っている。

2:30 彼は預言者であって、『その子孫のひとり王位につかせよう』と、神が堅く彼に誓われたことを認めていたので、

2:31 キリストの復活をあらかじめ知って、『彼は黄泉に捨てられることがなく、またその肉体が朽ち果てることがない』と語ったのである。

アモ 3:7 (口語訳)

3:7 まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事もなされません。

使徒 2:39 (口語訳)

2:39 この約束は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわちあなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである。」

申 18:22 (口語訳)

18:22 もし預言者があって、主の名によって語っても、その言葉が成就せず、ま

ければ、それは主が語られたものではない。預言者が勝手に語ったのであるから、恐れることはない。

エレ 28:8、9 (新共同訳)

28:8 あなたやわたしに先立つ昔の預言者たちは、多くの国、強大な王国に対して、戦争や災害や疫病を預言した。

28:9 和を預言する者は、その言葉が成就するとき初めて、まことに主が遣わされた預言者であることが分かる。」

申 13:2~4 (新共同訳)

13:2 預言者や夢占いをする者があなたたちの中に現れ、しるしや奇跡を示して、
13:3 そのしるしや奇跡が言ったとおり実現したとき、「あなたの知らなかった他の神々に従い、これに仕えようではないか」と誘われても、

13:4 その預言者や夢占いをする者の言葉に耳を貸してはならない。あなたたちの神、主はあなたたちを試し、心を尽くし、魂を尽くして、あなたたちの神、主を愛するかどうかを知ろうとされるからである。

イザ 8:20 (新共同訳)

8:20 そして、教えと証しの書についてはなおのこと、「このような言葉にまじらない力はない」と言うであろう。

Iヨハ 4:1~3 (新共同訳)

4:1 愛する者たち、どの霊も信じるのではなく、神から出た霊かどうかを確かめなさい。偽預言者が大勢世に出て来ているからです。

4:2 イエス・キリストが肉となって来られたということを公に言い表す霊は、すべて神から出たものです。このことによって、あなたがたは神の霊が分かります。

4:3 イエスのことを公に言い表さない霊はすべて、神から出ていません。これは、反キリストの霊です。かねてあなたがたは、その霊がやって来ると聞いていましたが、今や既に世に来ています。

たその事が起らない時は、それは主が語られた言葉ではなく、その預言者がほしのままに語ったのである。その預言者を恐れるに及ばない。

エレ 28:8、9 (口語訳)

28:8 わたしと、あなたの先に出た預言者は、むかしから、多くの地と大きな国について、戦いと、ききんと、疫病の事を預言した。

28:9 平和を預言する預言者は、その預言者の言葉が成就するとき、真実に主がその預言者をつかわされたのであることが知られるのだ。」

申 13:1~3 (口語訳)

13:1 あなたがたのうちに預言者または夢みる者が起って、しるしや奇跡を示し、
13:2 あなたに告げるそのしるしや奇跡が実現して、あなたがこれまで知らなかった『ほかの神々に、われわれは従い仕えよう』と言っても、

13:3 あなたはその預言者または夢みる者の言葉に聞き従ってはならない。あなたがたの神、主はあなたがたが心をつくし、精神をつくして、あなたがたの神、主を愛するか、どうかを知ろうと、このようにあなたがたを試みられるからである。

イザ 8:20 (口語訳)

8:20 ただ教とあかしとに求めよ。まことに彼らはこの言葉によって語るが、そこには夜明けがない。

Iヨハ 4:1~3 (口語訳)

4:1 愛する者たちよ。すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、ためしなさい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである。

4:2 あなたがたは、こうして神の霊を知るのである。すなわち、イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白する霊は、すべて神から出ているものであり、

4:3 イエスを告白しない霊は、すべて神から出ているものではない。これは、反キリストの霊である。あなたがたは、それが来るとかねて聞いていたが、今やすでに世にきている。

マタ 7:15～20 （新共同訳）

7:15 「偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまとうてあなたがたのところに来るが、その内側は貪欲な狼である。7:16 あなたがたは、その実で彼らを見分ける。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるだろうか。

7:17 すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。

7:18 良い木が悪い実を結ぶことはなく、また、悪い木が良い実を結ぶこともできない。

7:19 良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。20 このように、あなたがたはその実で彼らを見分ける。」

黙 12:17 （新共同訳）

12:17 竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残りの者たち、すなわち、神の掟を守り、イエスの証しを守りとおしている者たちと戦おうとして出て行った。

黙 19:10 （新共同訳）

19:10 わたしは天使を拝もうとしてその足もとにひれ伏した。すると、天使はわたしにこう言った。「やめよ。わたしは、あなたやイエスの証しを守っているあなたの兄弟たちと共に、仕える者である。神を礼拝せよ。イエスの証しは預言の霊なのだ。」

マタ 7:15～20 （口語訳）

7:15 にせ預言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲なおおかみである。7:16 あなたがたは、その実によって彼らを見分けるであろう。茨からぶどうを、あざみからいちじくを集める者があろうか。

7:17 そのように、すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。

7:18 良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が良い実をならせることはできない。

7:19 良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれる。20 このように、あなたがたはその実によって彼らを見分けるのである。

黙 12:17 （口語訳）

12:17 龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った。

黙 19:10 （口語訳）

19:10 そこで、わたしは彼の足もとにひれ伏して、彼を拝そうとした。すると、彼は言った、「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたと同じ僕仲間であり、またイエスのあかしびとであるあなたの兄弟たちと同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい。イエスのあかしは、すなわち預言の霊である」。

金曜日 8月7日 さらなる研究

「主に信頼しつつ、人々を働きに行かせなさい。そうすれば、主は彼らと共に行き、魂に罪を悟らせ、魂を回心させてくださる。ある働き人は話が得意であり、ある人は書くことが得意であり、ある人は誠実で真摯で熱心な祈りの賜物を持ち、ある人は歌う賜物を持っているかもしれない。また、ある人は神の言葉を明瞭に説明する特別な力を持っているかもしれない。そして、それぞれの賜物は、神が働き手と協力されるので、神のための力となる。神は、ある人には知恵の言葉を、ある人には知識を、ある人には信仰をお与になる。しかし、すべての人は同じ頭のもとで働くべきである。賜物の多様性は、働きの多様性につながるが、『すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です』**〔口語訳〕『すべてのものの中に働いてすべ**

てのことをなさる神は、同じである』(Ⅰコリ 12:6)。

劣っていると思われる賜物を、誰も軽んじてはならない。すべての人を働きに行かせなさい。自分には力ある業ができないと思って、不信仰のうちに手をこまねいてはならない。自分に目を向けるのをやめ、あなたの〔真の〕指導者に目を向けなさい。柔和に、誠実に、愛をもって、自分にできることをしなさい」(『アドベント・レビュー・アンド・サバス・ヘラルド』1906年4月12日号、英文)。

【参考】—Ellen G. White, in *The Advent Review and Sabbath Herald*, April 12, 1906.

“Let men go forth to labor, trusting in the Lord, and He will go with them, convicting and converting souls. One worker may be a ready speaker, another a ready writer, another may have the gift of sincere, earnest, fervent prayer, another the gift of singing. Another may have special power to explain the word of God with clearness. And each gift is to become a power for God because He co-operates with the worker. To one God gives the word of wisdom, to another knowledge, to another faith. But all are to work under the same head. The diversity of gifts leads to a diversity of operations, ‘but it is the same God which worketh all in all’ (1 Cor. 12:6).

“Let no man despise the supposed lesser gifts. Let all go to work. Let no one fold his hands in unbelief because he thinks that he can do no mighty work. Cease looking at self. Look to your Leader. In meekness, sincerity, and love do what you can.”

「私たちはそれぞれ、ほかの人の考え方から得られる助けを必要としている。神は、私たちの考え方だけでなく、ほかの人の考え方を通して働かれる。異なる人たちに与えられたさまざまな賜物は、『聖なる者たち(を)奉仕の業に適した者と(し)、キリストの体を造り上げ(る)』〔口語訳『聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ(る)』〕(エフェ[エペ]4:12)のために混じり合うべきである。……

私たちの前には常に障害があるが、私たちは指導者に従い、手を取り合って一致団結しつつ、困難に立ち向かわねばならない」(エレン・ホワイト『天を見上げて』141 ページ、英文)。

【参考】—Ellen G. White, *The Upward Look*, p. 141.

“We each need the help we can receive from other minds. God will work in other minds than ours. The various gifts given to different ones are to blend for the ‘perfecting of the saints, for the work of the ministry, for the edifying of the body of Christ’ (Eph. 4:12). . . .

“There will always be obstacles before us, but we are to follow our Leader, and meet our difficulties unitedly, hand in hand.”

話し合いのための質問

- ① 預言の賜物について、もう少し考えてみてください。もし異言が解釈されないのであれば、なぜ預言のほうが異言よりも重要なのでしょうか
- ② 安息日学校のクラスで、エレン・ホワイトの生涯と働きについて、また彼女が預言の賜物をあらわした人物だと、なぜ私たちは教会として信じているかについて、話し合いましょう。この賜物は教会に、どんなすばらしい祝福をもたらすのでしょうか。また、この賜物を用いる最善の方法は何でしょうか。

【参考】英語テキストの③を記載します。

Think of three to five people who genuinely love you. How do you know their love for you is true? What does this tell you about why Paul spoke so much about love in his discussion on spiritual gifts?

あなたを心から愛してくれる人を3人から5人思い浮かべてみてください。彼らのあなたへの愛が本物だと、どうしてわかるのでしょうか。このことから、パウロが霊的賜物について論じる中で、なぜこれほどまでに愛について多く語ったのか、どのようなことがわかりますか。

- ③ 愛がいかに重要であるとしても、なぜ愛だけを基準として、誰かが真理を語っているかどうか、またその人の言葉に耳を傾ける価値があるかどうかを判断してはならないのでしょうか。

45

I コリ 12:6 (新共同訳)

12:6 働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。

エフェ 4:12 (新共同訳)

4:12 こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、

I コリ 12:6 (口語訳)

12:6 働きは種々あるが、すべてのもののの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである。

エペ 4:12 (口語訳)

4:12 それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、

【参考】副読本にある《概要》を転載します。

コリントの信徒への手紙 I (コリント人への第一の手紙) 12~14章において、パウロは、霊の賜物は多様性を通じて一致を促進するために与えられており、愛こそが本質的な指針であると示唆しています。すべての賜物は重要であり、キリストの体の中で一定の位置と機能を持っています。パウロは、異言を話すことは価値があるが、それには解釈が伴わなければならないと述べています。さらに、預言の賜物がキリストの再臨まで教会を強める上で重要な役割を果たしていることを強調しています。